

こころ日記

「 ぼちぼち 」

エー、こんな子いやや！

脇野 千恵

夢を叶えた少年がいます。

彼が高校3年生の夏休み、私は甲子園へ3回、応援に行きました。

B男が中学校に入学してきた4月、私は国語科担当として彼のクラスに入りました。学習の準備も何もしない。授業中は教師や友だちに暴言を吐く。ずっと私語が止まない彼に、毎時間手を取られ、ほとんど疲れる毎日でした。

当時の勤務校は、市内でも屈指の荒れた学校として有名でした。あそこにだけは転勤したくないと、教師達は口々に囁いたものです。私は講師でありながら（今でこそ担任は外れていますが…）担任に大抜擢され、その年窃盗などの経験をもつ転校生がいるクラスを持ちました。

どのクラスもそれぞれに問題を抱えていたので、贅沢はいえませんでした。

小学校からの申し送りでは、B男は問題児として挙がってきていました。事前にわかっていると、私達もそれなりの覚悟をして身構えますが、時々ノーマークで入ってくる子がいると、不意打ちをくらったように一気にクラスが崩れていきます。B男のクラスにはもう一人そんなC太がいました。

当然のごとく、毎日、毎時間、何かしらトラブルが発生し、段々授業の成立が難しくなっていました。私の国語の授業もなかなか危ないものでした。

挑発に乗らない、暴言で叱らない、他の生徒の学習権を守るなど、自分を律するのに必死な日々。自身の教育理念やしつけのあり方に問題があるのでは？自分の中か

ら「自信と誇り」という言葉がどんどん消えていきました。

真面目な人間は、この辺りで休み始めたりするのですが、幸い私は、何があっても学校へ行くことを止めることはしませんでした。

担任はおもしろい！と言って、定年間際になっても役職につかない教師がいます。私も教員生活の2/3は、担任をしていましたが、どちらがいいか何とも言い難いのが正直なところです。

年度が変わり4月のクラスが替えは、子どもたちにとっては死ぬか生きるか？それ程緊迫した大イベントです。

下駄箱の入り口に張り出された名簿から、自分の名前を探す姿はとてもけなげです。そんな様子を見ている教師陣は、子どもたちの反応を半ば予想していたかのように、冷静に観察しています。

「先生、クラス替えってどうやって決めるの？」

とよく聞かれますが、すかさず、「あみだくじ！いやじゃんけん？」などと答えたりします。

そのクラス替えは、年明け早々から着々と進められます。

まず、双子や親戚は一緒にしない。小学校で親同士がトラぶった！これもダメ。できるだけ問題とされる生徒は分散する。不登校傾向も。学力の平均を見るといったことなどたくさんの項目についてのデータを並べ、延べ10回以上の会議で検討します。

今年もある生徒が、「先生、俺のことはめたやろー。ほんま、

ないわー。」

と嘆いた子がいました。

私自身も、中学3年時のクラス替えには、してやられたと感じたものです。

子どもにとって、クラス替えはドキドキものですが、私達教師も誰がどのクラスを、どの子の面倒を見るのか、といったことでのちょっとした攻防戦があることは否めません。クラスの争奪戦？駆け引き？といってもいいかもしれません。重い空気のまま事が決まることで納得のいかない教師がいたりすると、それは子ども達にとっても辛い一年となります。

誰が担任になるか、そのことも子ども達の人生に、何か大きな変化をもたらすものがあるのではないのでしょうか。

2年生になったB男。そしてもう一人のC太。二人は学年の要です。まさか国語の授業でバトルし続けたB男を担当？

いやC太？クラス決定には、それなりの責任と覚悟が必要だとういことは理解していますが、どちらかを選択しろといわれたら…今までになく悩んだ末、B男を担当することにしました。理由なんてありません。

思春期にいる彼らは、自分が正しいと思って毎日行動しています。ある教師は、体つきも大きくなった少年から何をされるかわからないと、とても恐がりました。子どもに罪はありません。私はB男とあと二年間の中学校生活を共に過ごす覚悟を決めたのでした。

もう昔になりますが、少年法改正があった時、子ども達は口々に

「14歳になったら、警察につかまるんやろ？」

「ほな13歳までに、一杯悪いことしたらええねん。」

と、よく声高に言ったものです。だからといって、そんな悪いことをすぐにするわけではありませんが。

このことは、荒れている学校では実はとても重要なことなのです。

2年生になったB男は、クラスの違うC太と、毎日色々な事件を起こしていました。喫煙、飲酒、バイク、万引きなど。(少年にはよくある問題行動ですが。)

ある日、彼の行動について指導をした私は、B男に胸ぐら捕まれ暴力を受けました。幸いたいた怪我ではありませんでしたが…。しかしこのことは、教師が決して見逃してはならない問題です。特に生徒指導上、「対教師暴力」としてどのように対応するかは、「14歳」という年齢が大きく左右するからです。

例の如く早速生徒指導部会が開かれ、B男の問題行動について討議されました。担任の方針からは、ずっと外れたところでの判断が下されるのです。

普通、こういった問題対応の流れは、教師の怪我の状況→病院→診断書→被害届けとなります。私はすぐに管理職に呼ばれ、

- ・体は大丈夫か？
- ・病院へ行って、診断書をもらうか？
- ・場合によっては被害届けを出すということもできるかどうか？

と尋ねられました。

強引な管理職は、有無も言わずすぐに病院へ行けと言い放ちます。学校で手に負

えない子は、様々な問題行動を取り上げられ、やがて施設送りとなることを

知っていた私は、

「被害届は出しません！」

と答えました。

B男は母親と共に、近隣のサポートセンターへのカウンセリングに暫く通うことで、事なきを得ました。

しかし、彼の問題行動はすぐに修まったわけではありません。C太との繋がりも切れず、毎日のように家庭訪問に明け暮れていました。もうすぐ14歳の誕生日を迎えるというのに、このままだと高校へも行けなくなる。私は彼のために被害届けを出さなかったことが無駄にならないよう、B男の些細な問題行動については、細心の注意を払い自身で指導するようになりました(もみ消し?)。この時ばかりは、「ハウレンソウ」は役に立たなかったように思います。

実はB男には、ずっと続けてきたことがありました。それは硬式野球です。地域のクラブチームに所属し、土日は休む間もなく猛練習。時に試合会場へ足を運ぶと、学校では見せないB男の活躍ぶりを目にすることができました。

「なんで、学校ではちゃんとできひんのかなあ。」

とつぶやいたものです。

B男と両親の夢は、「甲子園」。

入学早々からの彼の口癖は、

「おれ甲子園行くねん。みんな応援しにきてやあ。」

誰も本気にはしていませんでしたので、「わかった、いったるわ。」

と答えるのが精一杯でした。

やがて3年生になり、暗黙の了解のもと、B男の担任は私と決められました。野球だけは辞めさせたくないという両親の強い思いから、悪行については殴ってでもわからせるというしつけは徹底されました。「14歳」という節目も大きかったと思います。次第にあの荒れは一体何だったのかと思う程、落ち着いた学校生活を送るようになっていきました。そして、希望する高校への合格切符を手にすることができたのでした。

甲子園のマウンドを走るB男の後ろ姿は、廊下を駆け回る懐かしい姿でした。夢をみているのか？とも。

その年、B男の同級生数人は更正施設に入りました。私が担任したことのある子もいましたが、問題行動の内容はB男と同じようなことだったように記憶しています。

B男と彼らとの違いは何だったのだろう？いつもそのことが頭をよぎります。

担任の裁量によって決められた彼らの進路。その子のためと考えてのことでしょうが、彼らはそのことをどのように受け止めたのでしょうか？

今もB男の母親と出会うことがあります。当時、思春期なんてそう長くは続かないから、と励まし続けました。

「あの時、ほんまに死んで！と何回思ったことか…」

そんな笑い話と言えるのも、今だからこそです。高校に入り甲子園に行くという夢を果たしたB男は、今また将来への職の夢

を果たすために、次の学校に通っています。

B男のような子は、たくさんいます。そもそももっともって苦勞をしてそんな子を育てたという教師もいることでしょう。この話は何も特別な話ではありません。

思春期にいる子どもたちは、まだまだ未熟です。大人になってしまった者には、随分昔のことで忘れてしまっていますが、みんな思春期があったのです。少なくとも私達プロ集団は、思春期時に起こるであろう事柄については、専門家であってほしいものだといつも思っています。

誰もが担任をいやがったB男との生活。子どもにとって何がよかったのか、何がよくなかったのかということ学ぶことができました。そして、何かあったとき、誰がそのことにきちんと向き合うのかといったことも。

今、私自身の夢も叶えてくれたB男に感謝・感謝です。

(中学校教員 脇野千恵)